GREEK and ETRUSCAN VASE

ギリシア エトルスク陶器

パエストゥムにて　藤田氏

GREEK and ETRUSCAN　VASE

ギリシア　エトルスク陶器

Villanovan
ビィラノーヴァ期

Etruscan
エトルスク

Corinthian
ギリシアコリント式

Attic Blackfigured
ギリシア黒絵式

Attic Whitegured
ギリシア白色レキュトス

Attic Redfigured
ギリシア赤絵式

Roman
ローマ期

GREEK and ETRUSCAN VASE

from XI cent. B.C. to II cent. B.C.

in Fujita Collection

ギリシア　エトルスク陶器

紀元前11世紀～紀元前 2 世紀

藤田コレクション

VILLANOVAN
ヴィラノーヴァ期

2

3

4

6

7

8

10

11

12

14

15

14A

17

18

19

20

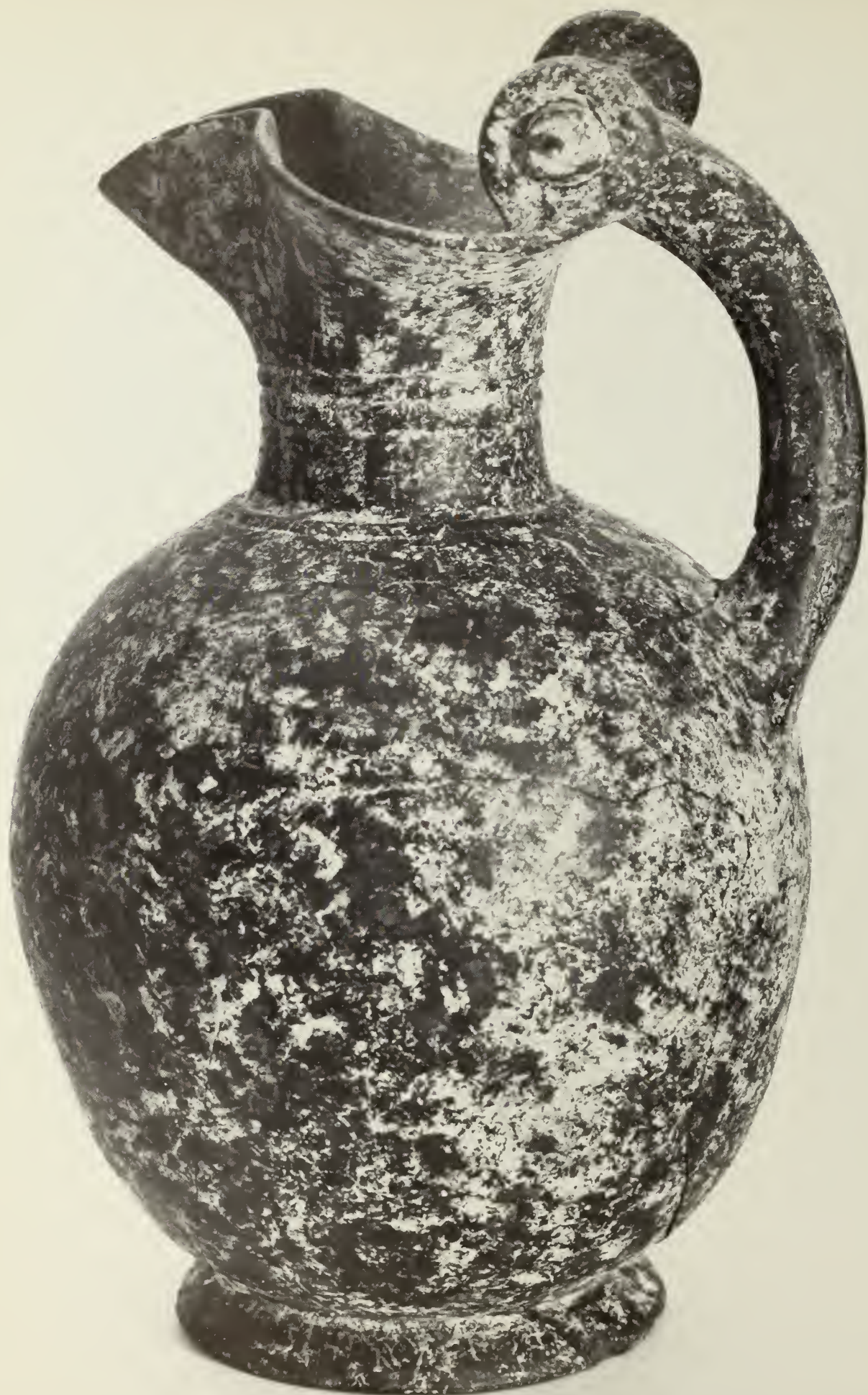
21

23

24

ETRUSCAN
エトルスク

28

29

CORINTHIAN
ギリシアコリント式

32a

32b

32c

33A

33B

34B

34A

35B

38a 38b

ATTIC BLACKFIGURED
ギリシア黒絵式

41a

42 a

45 B

46 a

46 b

47B

ATTIC REDFIGURED
ギリシア赤絵式
ATTIC WHITEGURED
ギリシア白色レキュトス

48B

49 A

49 B

50 A

50a

50b

50c

50d

50 e

51B

51A

ROMAN
ローマ期

解　説

ヴィラノーヴァ人（Villanovans）とエトルスク人（Etruscans）の関係

紀元前10世紀頃から，イタリアはヴィラノーヴァ文化に代表される鉄器文化に入って行く。（ヴィラノーヴァとは，現在のボローニャ近郎の村の名で，ここに，文化の最初の遺跡が発見されたので，こう呼ばれる）このヴィラノーヴァ文化は，農耕民族の文化であり，死者を火葬にして穴を掘り骨壷に収める井戸型方式をとり，この墳墓群が，今日，イタリアの地，そこここに発見されるのである。

ヴィラノーヴァ人とエトルスク人の関係は，エトルスク人起源問題とも関連して，未解決の問題が多く定説を持たないが，ここでは主に，タルクイニアにおけるヴィラノーヴァ文化の研究で名高い Hugh Hecken 教授の説をとることにする。

旧石器時代以来，青銅器全時代を通じて，イタリアには，地中海人種リグレシクロ人の居住があったが，新石器時代から，北イタリアは北ヨーロッパ文化の影響を残しているのに対して，東南イタリアは，東地中海，エーゲ海沿岸地域の影響を受けており，青銅器時代になると，ミケネ文化の影響がエミリア地方にまで達していたことが明らかである。

前10世紀頃になると，ヴァルカンを中心とした東ヨーロッパ及び中央ヨーロッパからイタリア半島に多くの人間が移住し，（前者が ヴィラノーヴァ 民族形成に人口的意味を持つほどの多数の集団であったのに対し，後者は，繁栄して行くヴィラノーヴァ人の集落地に魅きつけられた金属細工人達だったのかもしれない）土着の民族を南に追いやりながら，又一部は彼等と融合しながら，アペニン山脈の西に位するエトルリヤ地方，カンパーニャ地方，アペニン山脈の北東道のアドリア海沿岸地方の三地域に定住した。時代を下って，そこに東地中海，エーゲ海沿岸地方から，海を渡ってやって来た人達がこれに加わり，全く同じとは云えないにしても，それぞれの地に地域差のほとんど認められない類似した文化を残し，ここにヴィラノーヴァ人の複合民族が形成したのである。

この海からの民族は，時代の一致という問題はあるが，数々の伝記，ヘロドトスのリディアからのティルセニアンの移住に関する叙述，ヘラニクスのペラスギ族に関するもの，トロイヤ戦争の英雄達の西方諸国の建設に関するもの，又，ローマ時代のリヴィウスのアイネイアスは，エトルスク人との戦いで殺されたなどという叙述を想い起す。

前8世紀後半になると，この東地中海沿岸，エーゲ海沿岸地方の影響に近東諸国の影響までも加って，それは時代と共に増加し，前7世紀に入ると，中部イタリア，エトルリア地方の文化に大きな影響を及ぼすような民族がやって来て，その地方に定着した事実が，数々の考古学的資料から明らかになる。

この一つの流れは，エジプトからの影響を含めたシリア，キプロスからのものであり，これは，前8世紀すでに地中海に進出を始めていたフェニキア人との交易を介したもので，又，前8世紀後半のアッシリア人のシリア，パレスティナ征服によって生じた避難民もこれに加わった。もう一つの流れは，前8世紀末から前7世紀にかけてのキンメル人の侵入が原因で，フリギア，リディアの首都を含めての，小アジア，黒海沿岸地域からやって来た民族である。

これに関しては，ギリシアの東方様式を通して，ギリシア人を介して，エトルリヤの地に伝播したという説もあるが，結論は，これからの研究に待たなければならない。

ともかく，ここに，ギリシアの強力な影響が加って，後のローマに絶大な影響を与えるエトルスク民族が形成するのであるが，その重要な要素を成すものは，あくまでもヴィラノーヴァ人である。

前7世紀のエトルスク語の成立を機に，まさにこの事実からのみ，ヴィラノーヴァ人なる名称から，エトルスク人という名称に代るが，エトルスク都市の最も重要な建設者はヴィラノーヴァ人であった。

ギリシァ陶器がなぜエトルリアの地に見い出されるか

紀元前8世紀末から前3世紀にかけては，ギリシア，フェニキア，カルタゴが，シチリア，南イタリア，ティレニア海沿岸で，植民や交易をした最盛期にあたる。

当時，現在のイタリア中部地方を中心に住んでいたエトルスク人の居住地には，鉱脈地帯があり，鉱石資源が豊富に埋

蔵されていて，銅，鉄，亜鉛，銀，金を産出して，土着の未開民族征服，領土拡大のために必要な武器，農耕機具を作る材料となり，エトルスク人の富と権力を決定的にする大きな役割をはたし，地中海の制海権を征圧した。

この鉱石資源は，東方の先進文明国から海をはるばるやって来た人達にとっても大きな魅力であり，海上交易権益に関して，利害複雑なものはあったが，友好的な経済関係も成立して，商業取引が広く行われた。

エトルスク人は，鉄，銅，銀，或いは，すでにヴィラノーヴァ時代から発達が始っていた冶金術によって，それ等を加工品にして，武器，青銅彫像，生活用什器，飾装品などを輸出して，その代償に東方諸国から珍しい品物を買い入れた。ギリシア人は陶器や装身具，フェニキア人はガラスやオリエント色豊かな装身具，カルタゴ人は衣料や象牙を，エトルリヤの地にもたらした。

一方，当時，東方からやって来て先住民に加わり，エトルスク民族形成の一大要因となった近東，小アジア，黒海沿岸地方からの人達は，新しい宗教と共に，人間の来世についての新しい概念をもたらして，埋葬法，葬祭儀式に新しい風習を伝えた。すなわち，人間の来世について，他の先史時代の民族，ことに古代アジアの幾つかの民族と同じく，死者は墓の中で甦り，冥界の生活と死体の埋葬状態は密接な関係があるというもので，この信念から，死者には高価な衣裳が着せられ，香料がまかれて石棺に収められた。墓は冥界で生き続ける死者の家として，墓室は当時彼等が生活していた家の内部構造に似せて作られた。そして，その中には，死者が生き永らえるために必要な食物，酒を始めとして，奉献彫像，動物犠牲，死者の遺愛品や生活用品の数々の陶器，武器，装飾品などが安置されたのである。当時の彼等の宗教心の深さについては，莫大な数の献納物によっても推測することが出来る。この副葬品の中には，当時当方諸国との交易によって持たらされた物品が，エトルリヤ産の物品と共に含れていて，ギリシアから到来した陶器類も，エトルリア原産のブッケロ等の陶器類と共に，二千数百年を経た今日，当時のままの姿で，エトルスク墳墓から発掘されるのである。それ等は初期ロードスのものから，プロトアッティカ式，プロトコリント式，コリント式，アッティカ黒絵式，赤絵式，白色地陶器，とアルカイクからクラシックまで総ての時代を包含しているのである。

1　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　灰色幾何学刻文土器
紀元前10世紀～8世紀　高41.5　径16.0
Villanovan cinerary urn engraved with geometric pattern
背高の壷の体部には五ケの複合まんじ，頸部には複歩雷文，三重線及び小同心円文様の刻文が周囲に刻み込まれている。

2　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　黄色突起付土器
紀元前11世紀　高26.0　径26.0
Villanovan urn
黄土色調の地肌の体部上位に四つの鋭突起と，その各々の下に凹状斑が装飾されている。

3　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　両耳付大土器
紀元前8世紀　高37.0　径40.0
Villanovan krater
暗赤色調の地肌の体部には，再面中央部に馬蹄型浮彫装飾，再わきにも一対ずつの浮彫装飾があり，台高になっている。

4　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　黒色網目把手クラテル土器
紀元前8世紀　高22.0　径22.0
Villanovan krater
体部全体にたてに浮彫装飾が等間隔にあり，把手は縄状にねじれている。

5　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　両耳付大土器
紀元前8世紀　高40.0　径50.0
Villanovan grand krater
暗灰色調の地肌に，再面中央に鼻状突起と四方上部に四組の圏点文，その他の部分には浮彫文様が全体に装飾され，突起付複式把手を持ち，腹の大きくふくらんだ器体には小さな台部がついている。

6　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　両耳付幾何学刻文黒陶蓋付土器
紀元前8世紀　高27.0　径25.0
Villanovan pixis with a cover engraved with geometric pattern
これは宝石入れとして使用されたもので，体部の周囲には小同心円の二段の並列，それを刻線でペンダント文様につなぎ装飾され，台高でふた付になっている。

7　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　黒陶刻線文様土器
紀元前8世紀　高26.0　径25.5
Villanovan olpe engraved with geometric pattern
肩部に単純逆二重三角の刻線文様の装飾がされている。

8　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　両耳付土器
紀元前8世紀　高28.0　径32.0
Villanovan krater
暗赤色調の地肌で体部には等間隔にたてに浮彫装飾，再わきにはろうそく立と思われる耳がついている。

9　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　注口複把手付土器
紀元前8世紀　高33.5　径19.0
Villanovan jug with spout
暗赤色調の地肌で体部には，たて浮彫り装飾がついていて，口が上に長くのびて，把手は複合型になっている。

10　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　両耳付黒陶土器
紀元前8世紀　高23.5　径26.0
Villanovan krater
両面中央部に突起と半円状浮彫があり，体部には等間隔に浮彫の装飾がついていて，台高になっている。

11　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　両耳付土器
紀元前8世紀　高21.0　径28.0
Villanovan krater
両面中央部に突起と，その上部に三組の三点模様，全体に刻彫装飾がされている。

12　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　青銅鉢
紀元前7世紀　高5.0　径17.0
Villanovan bronz bowl
鉢の周囲は菊花形に細工装飾されている。

13　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　両耳及び突起付赤色幾何学文様大壷
紀元前8世紀　高59.0　径52.0
Villanovan geometric grand amphora
両面中央部には突起があり，地肌はややきめ荒質の赤褐色で，同心円文様が白色で装飾され，ふたがついている。

14　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　初期神殿型の石棺
紀元前8世紀　高39.0　径47.0
Etruscan urn in form of the temple in early style

15　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　両耳付土器
紀元前8世紀　高30.0　径23.0
Villanovan krater
暗赤色調の地肌の体部には，たての浮彫装飾，両把手は上に

伸び，首がやや長くなっている。

16　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　両耳付幾何学文様土器
紀元前８世紀後半　高25.0　径30.0
Villanovan geometric krater
薄茶の地肌に，赤褐色で上部に幾何学的同心円，その下に縦複重三角が周囲に並列に装飾されている。

17　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　幾何学文様把手付土器
紀元前８世紀後半　高21.5　径17.0
Villanovan geometric oinochoe
薄茶の地肌に，赤褐色で上部に同心円文様，その上下を棒線と波線を並列にした台高の幾何学的文様で装飾されている。

18　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　黒色クラテル土器（小アンフォラふた付）
紀元前８世紀　高32.0　径28.0
Villanovan krater with a small cover-amphora
体部両面中央部に突起，その周囲に円形部分の浮彫装飾があり，台高になっている。小さなアンフォラの蓋がついている。

19　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　両耳付黒陶土器
紀元前８世紀　高26.5　径34.5
Villanovan Krater
暗赤色調の地肌の体部にはたてに８本の浮彫装飾がされている。

20　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　アンフォラ土器
紀元前８世紀　高15.5　径22.0
Villanovan small amphora
赤茶色の地肌に，肥手は複式で上部でねじれ，両面体部中央には突起があり，所々白色で装飾されている。

21　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　両耳付幾何学文様土器
紀元前８世紀後半　高27.0　径33.0
Villanovan geometric krater
薄茶の地肌に，赤褐色で周囲中央部に，斜格子縞菱形が並列に幾何学的に装飾されている。

22　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　両耳付幾何学文様赤色土器
紀元前８世紀後半　高26.0　径33.0
Villanovan geometric krater
赤褐色の地肌に，白色で上部に六ケ所斜格子幾何学文様と両耳の上部に同心円文様を装飾されている。

23　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　幾何学文様土器
紀元前８世紀後半　高23.5　径24.0
Villanovan geometric vase
白色の地肌に，太い赤褐色で幾何学的に斜格子縞文と無地を交互に配して装飾されている。

24　エトルスク　ヴィラノーヴァ期　両耳付幾何学文様赤色土器
紀元前８世紀後半　高23.0　径28.0
Villanovan geometric krater
赤褐色の地肌に，中央部に白色で同心円文様が下部から台にかけて線状に幾何学的に装飾されている。

25　エトルスク　市松縞文様大壷
紀元前７世紀後半　高52.0　径35.0
Etruscan urn with check pattern
地肌はきめ荒質の赤褐色で，浮彫りを８段つくり。上下は三角形，中は正方形をじぐざぐに市松様に白色で装飾されている。

26　エトルスク　ブッケロ　黒陶オルペ
紀元前７世紀後半　高25.0　径15.5
Etruscan bucchero olpe
口は三葉形で，首と耳にうねり状の装飾がされている。

27　エトルスク　ブッケロ　黒陶オルペ
紀元前６世紀　高23.0　径16.0
Etruscan bucchero olpe
口は三葉形で，中央部に二本の浮彫りの装飾がされている。

28　エトルスク　ブッケロ　カンタロス黒陶杯
紀元前６世紀　高11.0　径18.0
Etruscan bucchero kantharos

29　エトルスク　両耳複把手付小土器
紀元前７世紀後半　高11.5　径17.5
Etruscan small amphora
両面体部中央には突起と半円形浮彫り，その周囲にはたてに浮彫装飾があり，把手は複合形で上部でねじれている。

30　エトルスク　ブッケロ　黒陶杯
紀元前７世紀後半　高16.0　径14.0
Etruscan bucchero cup with a handle decorated with a human face
上に伸びた把手の頂点に二段の円錐節。そのつけ根には人顔

浮彫りが装飾されている。

31　ギリシア　コリント式　アリバロス

紀元前620年～610年　高23.0　径13.0

Corinthian aryballos

小さな把手が口縁部から肩についた香油入れで，右膝を地にふれ左脚をふみ出して，翼のある両腕をあげて膝足の姿をした鬚のある男性（ギリシア神話に出て来る，トラキア地方に住む北風ボレアースと思われる）を表面に，裏面には，女性の顔をつけ大きな翼をはばたくサイレンを腹部一ぱいに描き，それ等の空白にはロゼット文（円花文）をはじめとして充填文をあしらっている。形の細部は刻線で描き，口縁部の内側は残滴が外にたれないように小さな口にむかって内傾し，その上縁と肩には舌状文が装飾されている。

32　ギリシア　コリント式　オルペ

紀元前610年～600年　高20.0　径22.0

Corinthian olpe

ギリシア陶器として非常に希少な珍しい形のコリント式の壷である。オリエント風の植物文と獣帯文で二段に区分して，上段中央にはロータス文とパルメット文を組合せ，その両側にサイレン，白鳥を，下段中央には両翼を広げたサイレン，その周囲に獅子，豹，野生山羊，白鳥を配している。それ等の動植物の間の空白は，ロゼット文（円花文）をはじめとして多くの空間充塡文をあしらっている。又，それ等の細部は刻線で表わされている。裾は放射状の鋸歯文で，黒色の口頸部には白色と連珠文がある。

33　ギリシア　プロトコリント式　ピュクシス

紀元前690年～680年　高8.5　径14.0

Protocorinthian pixis

プロトコリント様式中期の非常に珍しい形の宝石入れとして作られたもので，本体には躍動する三匹の犬，ふたには四匹の躍動する兎を描き，空白を放射状に結んだ連珠文と×印で空間充填している。

34　ギリシア　コリント式　ピュクシス

紀元前610年～600年　高15.0　径16.5

Corinthian pixis

宝石入れとして作られ，ふた付の非常に珍しい形である。全体を植物文，獣帯文で装飾し，体部にはロータス文，豹，サイレン，白鳥，鷹を，ふたにはロータス文とパルメット文の組合せと翼を広げたサイレンを配している。それ等の動植物の間の空白は，ロゼット文（円花文）をはじめとして多くの空間充塡文をあしらっている。細部は刻線で描いていて，裾は放射状の鋸歯文である。

35　ギリシア　コリント式　円柱クラテル

紀元前600年　高30.0　径33.5

Corinthian column krater

口が広く腹部が張った典型的な円柱クラテルで，二段に区分され上段に踊るコマステース（酔客）両側の把手の所にサイレン，下段にサイレン，獅子，野生山羊の獣帯文を描き，それ等の間の空白には，ロゼッタ文(円花文)をはじめとして，多くの空間充塡文をあしらっていて，形の細部は刻線で描いている。裾は放射状の鋸歯文で，幅広い口縁部の両側には鬚のある男性胸像を描き，その周囲は波状文様で装飾されている。

36　ギリシア　初期コリント式　オルペ

紀元前640年～630年　高32.0　径17.0

Corinthian olpe

プロトコリント様式よりコリント様式への過渡期時代のオルペで，三段に区分した獣帯文には，上段中央に兎，両側に豹，中段中央に豹，その周囲にスフィンクス，兎，鷹，下段中央に牛，その周囲に豹，野生山羊とグリフォンを配している。それ等の動物の間の空白には，初期コリント特有のロゼット文（円花文）を空間充塡としてあしらって，細部は刻線で描いている。裾は放射状の鋸歯文で，黒色の口頸部及び耳には，放射線に結ばれた連珠文がある。獣帯文の中に兎が描かれるのは，非常に稀である。

37　ギリシア　コリント式　オイノコエ

紀元前610年～600年　高41.0　径22.0

Corinthian oinochoe

典型的なコリントの形で三段に区分した獣帯文には上段中央に豹の対偶文，中段中央に，白鳥，その周囲に野生山羊，スフィンクス，下段中央に白鳥その周囲に獅子，豹，白鳥を配している。それ等の動物の間の空白には，ロゼット文（円花文）をはじめとして，多くの空間充塡文をあしらって，細部は刻線で描いている。裾は放射状の鋸歯文で，黒色の口頸部，および，耳には放射線に結ばれた連珠文がある。

38　ギリシア　コリント式　オルペ

紀元前610年～600年　高32.0　径17.5

Corinthian olpe

典型的なコリントの形で，二段に区分した獣帯文には，上段中央に羽ばたいた白鳥，その両側に野生山羊と豹，下段中央にサイレン，その周囲に豹，大きく羽ばたいた白鳥，野生山羊を配している。それらの動物の間の空白には，ロゼット文

（円花文）をはじめとして多くの空間充塡文をあしらって，細部は刻線で描いている。裾は放射状の鋸歯文で，黒色の口頸部および耳には放射状に結ばれた連珠文がある。

39　ギリシア　コリント式　三葉形口　オルペ

紀元前600年　高42.5　径28.0

Corinthian olpe

四段に区分された獣帯文には，第一段中央に白鳥・野生山羊・豹・獅子，第二段中央に，グリフォン・野生山羊・白鳥・獅子，第三段中央に野生山羊・獅子・牛・グリフォン，第四段中央に獅子・野生山羊・白鳥・猪を配して，それ等の間の空白にはロゼッタ（円花文）をはじめとして，空間充塡文をあしらっている。細部は刻線で描き裾は放射状の鋸歯文で三葉形の口頸部および耳には連珠文がある。

40　ギリシア　コリント式　三葉形口　オルペ

紀元前600年　高30.0　径21.0

Corinthian olpe

二段に区分された獣帯文には上段中央に野生山羊，その両側に豹，羽ばたく白鳥，下段中央にコマステース(酔客)，その両側にスフィンクス，野生山羊，豹を配している。それ等の間の空白にはロゼッタ文（円花文）をはじめとして，多くの空間充塡文をあしらって，細部は刻線で描いている。裾は放射状の鋸歯文で，三葉形黒色の口頸部には放射線に結ばれた白色の連珠文がある。把手にはロータス文，パルメット文の組合せが描かれている。

41　ギリシア　アッティカ黒絵式　ニコクセノス画家のヒドリア

紀元前530年～520年　高31.5　径36.0

Attic blackfigured hydria by the nikoxenos painter

模よう付黒いキトンを着た三人の乙女が泉に水を汲みに来ている。先の乙女はゴルゴンの形の蛇口から水を汲んでおり，他の二人はヒユドリアを頭に乗せている。葉づきの枝の連続文様が空間充塡文となっている。画の縁飾として左右にザクロ文，上部にロータスの蕾文を装飾している。

ニクコセノスの画家　THE NIKOXENOS PAINTER

B. C. 500～530

紀元前6世紀第四4半世紀，ギリシアのアッティカ黒絵式陶器から赤絵式への過渡期時代の作家。現在までに，"ニコクセノスの画家”の作品とされるものは，黒絵式23点，赤絵式30点で，イタリア，カプア出土のミシシッピー博物館所蔵の「アテナの像」のアンフォラにある署名から，この作家の名前が明らかになった。前530年頃，アンドキデスの画家が赤絵式を考案した後，新しい様式の反作用を受けて，黒絵式に再び描写法を求めようとする作家達が現われて，形象を生き生きと描き，姿勢の写実性に忠実で，時には人物に敏捷さまでも表現することに成功した。ニコクセノスの画家は，この末期黒絵式及び初期赤絵式時代に活躍し，黒絵，赤絵の両技法を用い，特に黒絵式陶器にすぐれた作品を残している。又当時名声高い陶工に「Karos Legaros」(妙えなるレガロスの意）の如き称号を送る風習があり彼もその称号“カロス”を授かっている。日常生活における題材を伝統的な神話的主題と同じ位よく扱った。当コレクションのヒュドリアの「泉に水を汲みに行く乙女達」の主題も同時代の作家達に好まれた題材で，イタリアチエルヴエテリ考古博物館によく似た作品がある。

42　ギリシア　アッティカ黒絵式　アマシスの画家のアンフォラ　「アマシスの画家署名入り」

紀元前550年～540年　高34.5　径23.0

Attic klackfigured amphora, signed by amasis

中央に縁付帽子，羽根靴をつけ，左手にケリケイオン(揚杖)を持ったヘルメスが短いキトンを着て立ち，右側の短槍を手にキトンとマントをつけたアポロンと会話している。左側ヘルメスの後には，鬚のあるキトンとマントをつけた従者が立っている。裏面中央には，野獣達の女主人有翼の神アルテミスがキトンを着て蛇を両手に持ち，その両側にはマントを着て槍を持った二人の男が立っている。頸部にはロータスの蕾文，下部に放射状の鋸歯文が装飾されている。アマシスは中央右側に署名している。

アマシスの画家　THE AMASIS PAINTER

B.C.500～530

紀元前6世紀4四半世紀，ギリシアのアッティカ黒絵式陶器最盛期の代表的な陶工。アマシスの名前は現在までに〔M〕Epoiesen (made〔forme〕)なる動詞を伴って，9点の陶器（絵のない小さな破片一点を含めて）に現われている。絵画の様式がみな同じであることから，この陶工は画家と同一人物とも考えられるが確かではなく，“アマシスの画家”と呼ばれる。当時のギリシア陶器には陶工だけが署名している場合が多く，画家は陶工のために働くという第二義的な役割しか持たず器形の工夫が，絵画のそれより重要視されていた。“アマシスの画家”は，アンフォラ，オイノコエ，レキュトス，キリックス等様々な形の陶器に作品を残しているが，それぞれの形に独特の調和美があり表面の仕上げの精巧さと共に，彼の陶工としての傑出した存在を明確に位置ずけた。この時代の傾向は，エクゼキアスと“アマシスの画家”に大別されるが，前者が，生粋のアテネ精神から発した古典的な高雅さを極めて行ったのに対し，アマシスの画家は，イオニア趣味を敏感に取り入れて，自由で，生き生きとした，軽快で

明るい表現を好み，その筆致や素描家として完璧な技巧を示している。9点の署名入作品は，ネック・アンフォラ3点，オイノコエ4点，小鉢1点よりなり，当コレクションのアンフォラは世界初のものとなる。当コレクションもオイノコエは，ルーブル博物館所蔵の「ヘラクレス，オリンポスに帰る」の作品に似ている。署名のない彼の作品は，110点数えられている。

43　ギリシア　アッティカ黒絵式　三葉口　オイノコエ

紀元前520年　高30.0　径15.5

Attic blackfigured oinocoe

葡萄と酒と神秘的な狂乱を司る神デュオニューソスが，リュトンと細枝を持って中央に座り，二人のシレーノスがその周りを踊り狂っている。空間は葉つきの枝の連続文様を描き，上部は舌状文で装飾されている。

44　ギリシア　アッティカ黒絵式　アンフォラ

紀元前530年～520年　高33.5　径24.0

Attic blackfigured neck-amphora

中央に花輪を左手に持った若者が立ち，右側の鬚のあるキトンとマントを着た男が若者のあごに手をさしのべて，求愛している。若者の左側には，もう一人の鬚のあるキトンとマントを着たライバルらしき男が立っている。裏面には左側の若者に鬚のある二人の男が求愛しょうとしている。頸部にパルメット文とロータス文の組合せ肩部に舌状文，再横には大きなうず巻きつきパルメット文，下部に，ロータスの蕾文と放射状の鋸歯文を装飾している。

45　ギリシア　アッティカ黒絵式　大アンフォラ

紀元前520年　高45.0　径33.0

Attic blackfigured amphora

中央に，短いキトンを着て剣を片手にしたヘラクレスがケンタロウスと闘っている。左側にキトンを着た女性,右側には,兜，アエギス，キトンをつけ槍を手にしたアテナが立っている。裏面は，ディオニューソスがキトンを着て左手にリュトン右手に常春樹と葡萄の枝を持って立ち，その横にキトンを着たアフロディーテがエロスとヒメロスをだいている。その両わきにシレーノスが舞っている。頸部にロータスの蕾文，台部に放射状の鋸歯文が装飾されている。

46　ギリシア　アッティカ黒絵式　アマシスの画家のオイノコエ　「アマシスの画家署名入り」

紀元前550年～530年　高31.5　径18.0

Attic klackfigured oinochoe, signed by amasis

中央に二人の裸の男が立ち，左側の兎をつるした若者（eromenos）に，右側の鬚のある花輪を持った男が，若者のあごに手をさしのべて求愛しょうとしている。二人の両側には，長いキトンを着た二人の男が槍を持って立っている。頸部にパルメット文とロータス文を組合せた装飾がされている。アマシスは中央に署名している。アマシスの画家についての解説は No. 42 を参照。

47　ギリシア　アッティカ黒絵式　目付アンフォラ

紀元前530年～520年　高36.0　径25.5

Attic blackfigured eye-neck-amphora

中央に大担に目を描き，その間に学芸の神，音楽の神であるアポロンが，キトンとマントをつけて，頭に帽子をかぶって立ち姿で六弦の竪琴を弾いている。竪琴からは琴の下弦をおおうための模様入り布がたれている。裏面にも中央に大担な目を描きその間に葡萄と酒の神秘的な狂乱を司る神，デュオニューソスがキトンとマントを，頭には飾りをつけて，左手にリュトンを持ち立姿でもう一人の女性もキトンとマントを着て，左手を顔のところまで上げて，むかいあって立っている。頸部にパルメット文とロータス文の組合せ，肩部に舌状文，葉つきの枝の連続文，両横に大きなうず巻き付パルメット文，下部にロータスの蕾文と放射状の鋸歯文を装飾している。

48　ギリシア　アッティカ式　白色レキュトス

紀元前470年　高19.0　径7.5

Attic whiteground lekythos

白地の頸部の細い筒形で墓前の供物として用いられた。画題はその用途と形に応じて，死者との訣別，死国への旅立ちなど哀愁にみたものに限られた。これは一人の乙女がキトンとマントで装って椅子にかけて五弦竪琴を弾いている。裏面は胴部および肩部に，パルメット文が描かれている。

「詩の女神よ，われに歌え，カコの勇略の男子の物語を」ホメロス「オデュッセイア」

49　ギリシア　アッティカ式　白色レキュトス

紀元前460年　高16.5　径7.0

Attic whiteground lekythos

白地の頸部の細長い筒形で，肩の上に把手をもち，墓前の供物として用いられた。画題はその用途に応じて哀愁にみちたものが多かったが，これは珍しく中央に一匹の鹿を描いている。裏面にはパルメット文が描かれている。

50　ギリシア　アッティカ赤絵式　エウフロニウスの画家のキリックス　「エウフロニオス署名入り」

紀元前520年～500年　高13.5　径　把手付45.0　把手なし35.5

Attic redfigured kylix, signed by euphronios

若者がキトンを片はだぬぎ左手に小さな杯をもち，二つのクッションをひいてベットに横になり，側に女性が脱いだキトンを右手に持ち片膝をベットにかけて，若者が肩にさしのべる手に応えている。側のテーブルには桃と常春藤の枝があり，長い杖が置いてある。周囲は円形にメアンデル文で装飾されている。裏面には，デュオニューソスの信女である五人のマイナデスと三人の裸のシレーノスが常春藤の木の下で「デュオニューソスの秘事」の祭儀を行ない，二双笛の音に合せて半狂乱になって舞っている。各々のマイナデスはキトンを着て蛇，二双笛，テュルソス（蔦の木の枝の頭に松ぼっくりをつけた，デュオニューソス信徒の携えるもの）を持ち，二人のシレーノスは二双笛をふき，他の一人は舞っている。エウフロニオスは把手に署名している。

エウフロニオス　EUPHRONIOS B.C. 520〜480

紀元前6世紀第4四半世紀から，前5世紀第1四半世紀にわたってのギリシアのアッティカ赤絵式陶器の最も創造力ゆたかな作家。厳格様式の赤絵にその才能，技量を発揮したが，前520年頃から前500年頃までは画家として，その後，前480年頃までを陶工として活躍した。現在までに彼が画家として署名された作品は17点発見され，彼の作品と見做されるものは80点を数えられるが，その形は，クラテル，スタムノス，アンフォラ，ペリカイ，ヒュドリア，キリックス，スキュフォスと多種にわたっている。彼の卓越さは，その正確な写実主義にあり，特に人体構造の観察は，解剖学の発達した現在の我々にとっても，まさに驚異というよりはなく，実際我々の目に見えない部分までも透視見している。又，それぞれの人物の表情には，個性的な息吹きを与えており，これはエウフロニオに於て始めて，ギリシア陶器絵画に現われてきた現象である。こうして絶妙な構想を土台にして，赤絵式の可能性を十分に自覚して仕事を押し進め，見事な完成地域に達しているのである。彼の陶工としての署名のある作品は，15点残っているが，その中には，オネシモス，ドウリスの画家と共作した作品もある。前500〜475年の間はペルシャ戦争前後であったが，エウロニオスの開いた新しい世界は更に追求され，洗練されて赤絵式の最盛期を迎え，ギリシア美術に不動の位置を築いた。当コレクションのキリックスはエウフロニオスにより作陶され，彼自身によって描かれたものである。赤絵式の画家であるクレオフラデフの画家ブリュゴスの画家，画家マクロンも当コレクションのキリックスの主題「踊るシレノスとマイナデス」と同じ絵でキリックスに残しており，現在，三作品ともミュンヒェン博物館所蔵となっており総てエウフロニオスを踏襲したものでそれらの原作となる当作品はギリシア陶画史においても非常に貴重な作品である。

51　ギリシア　アッティカ赤絵式　円柱フラテル

紀元前470年　高26.0　径26.0

Attic redfigured column-krater

アルカディアの丘辺をさまようニンフ達の一人シューリンクスがキトンとヒマテイアを着て，狩猟のための弓を片手に裾をからげて二本の槍を手に追うパーンから逃げている。パーンは短いキトンとペタソスをつけている。頸部にはロータスの蕾文の装飾がされている。裏面は，手に杖を持ち若者がマントを着て立っている。

52　初期ローマ　大アンフォラ

紀元前2世紀　高95.0　径30.0

Roman grand amphora

地肌はきめ荒質の薄茶で長身の脚部は長く突起している。

発行人　藤田卓彦・編集人　藤田卓彦・印刷　大日本印刷株式会社・写真撮影　河野節夫・昭和47年9月1日発行